

=====

スペシャルコラム

新たな人生を船旅で

=====

あの船旅が心豊かな

人生を運んできた

《神奈川県》ケイ子さんの場合

横浜市で、豪華な 3LDK のマンションに暮らすケイ子さん（73 歳）。かつて両親と妹の 4 人で暮らしてらした家でしたが、父親が 15 年前に死去、5 年前に同居していた妹を病気で亡くし、3 年前には、この家で母親（享年 98 歳）を看取ったことで、ケイ子さん一人だけの住まいとなりました。

ケイさんは仙台生まれの二人姉妹。大手ゼネコンに勤めていた父親の仕事の関係で、小学校 5 年生の時に一家は横浜に移住。中高をミッション系の学校に通い、大学は米国に留学、語学に磨きをかけました。卒業後、米国にとどまり UN（国際連合）で働くことを希望していましたが、長女であることから断念。日本に帰国して他社で働いた後、幼児教育の財団に就職しました。

51 歳の時に財団の教育部門が解散するという憂き目に遭い、ならばと生徒を受け入れる形で、退職金を投じて幼児教育の会社を仲間と興すことに。しかし競争は激化、自身の退職金を使い果たし、致し方なく事業にピリオドを打ったのが 56 歳の時でした。

その後、横浜市の施設の指定管理 NPO に勤務した後、認知症の症状が出てきた母親の介護をしながら、比較的自由がきく英語を教える仕事につきました。

「母は肺炎による呼吸不全などの症状もあり、身体障害者 1 級でした。亡くなる年の 2 月末、食欲はなく、おかしいなと思い、かかりつけ医に連れて行ったところ心筋梗塞と診断され、即大きな病院に入院することになってしまいました」

入院中に母親の認知症はさらに進行し、それでも「家に帰りたい」と何度もケイさんに訴えました。容体が安定した 3 月末に退院させ、在宅医療を受けながらケイさんが寄り添う暮らしを再開しました。

「母は自宅に帰った事は認識していたようです。でも一緒にテレビを見ていても反応することが徐々になくなり、最後は好きだったテレビそのものを見なくなりました」

7 月のある早朝、ケイさんは前日薬を飲まなかった母親を心配して部屋に行ったところ、フッと小さく息を吐いて臨終を迎えたその瞬間に居合わせることに。それはこれまで母娘二人で暮らしてきたケイさんが、天涯孤独になった瞬間でもありました。

今、ケイさんは、ローンが済んだ持ち家に住み、蓄えもあります。「ボランティアみたいなもの」と言う英語のクラスをいくつか持ち、その収入と年金とで、経済的な心配はないようです。

母親の介護をやり切って一人になったら、自分自身のことを考える時間が生まれました。

「そんな時に友人から『クルーズ船に乗って世界一周するのが夢』と言う話を聞いたのでした」

それからというもの、なぜかクルーズ船の旅行が気になる機会が多くなったといいます。これも何かの縁と都内で開催された世界一周クルーズの説明会に出かけ、なんとその場で参加を申し込み、早々と早期割引の費用を支払ってしまいました。母親が亡くなって 2 ヶ月後のことでした。

「これからの人生をどのように生きていくか、大海原を眺めながら考えるのもいいなと思ったのです」

参加した2016年の世界一周クルーズは、日本を12月9日に出港し、日本に戻るまでの104日間を、アフリカや南米、南海の島々など13カ所に寄港・上陸しながら見聞を広める船旅でした。長期の船旅に参加できる人はおのずと時間とお金に余裕がある人に限られます。この船旅への参加が、後のケイ子さんの人生に大きな福を連れてくることとなります。

「乗客は1000人ほど。その多くは日本人でしたが、中国や韓国からの参加者もいました」

ケイ子さんは4人部屋を申し込み、料金はおよそ180万円。寄港地でオプションツアーに参加すれば、さらに費用は増してきます。

「4人部屋の船室はとても狭く、シャワーやトイレは共有。そんな中での長旅ですから、いろんなことがあります。他の4人部屋では、別の部屋に移りたいとか、1人部屋に替わりたいなど、ストレスを感じる人も出てきていました。でも、私たちの部屋はそんなこともなく、仲良く104日間の旅を終えることができました」

ケイ子さんの同室には年齢が近い北海道、広島、千葉からの女性参加者が。昼食と夕食は一緒に過ごし、後はそれぞれ自由に船内での勉強会やワークショップ、オプションツアーに参加するという流れができていきました。

「夜、船室で『こんなことをした』と、それぞれがその日の体験を話しながら親睦を深めたのもよかった」とケイ子さんは振り返ります。

長旅ゆえに、気の合う友人が徐々にできていき、旅を終える頃には外国人も含め以降一緒に旅を楽しむかけがえのない友人ができたのでした。

同室の女性一人は夫を亡くし、母親も看取り、仕事に出かける以外は家に引きこもり気味だったといいます。勇気を出して参加した船旅で、やはり母親を亡くしたケイ子さんや他の人たちと出会い、一緒に過ごす中で互いに心を開いていき、まるで家族のような存在になりました。

2017年3月に世界一周クルーズを終えたばかりでしたが、その年の9月には船旅仲間4人は、船で知り合った中国人の招待で中国へ旅行。さらに昨年は11月の中欧、年末のニューヨーク旅行など、やはり船旅仲間らと計7回、国内外の旅行に出かける心弾む年になりました。

かつての母親の部屋は、旅仲間のためのゲストルームとなり、日本人はもとよりアメリカ、中国から訪ねてきた友人が宿泊。自宅をベースに国内の旅に行くことも増えてきました。従来の友人に加え、船旅で海外まで広がった交友関係。ケイ子さんは今、まさに人生を謳歌しています。

「船旅で、様々な人と知り合い、いろんな世界を見て、普段できない経験をしました。でも、世界にはまだまだ知らないことがいっぱいあります」と船旅をきっかけに進むべき道が見えてきたといいます。

昔から人が好きで、外国人はどうしてこういう性格の人間になるのかとすることに興味が尽きないというケイ子さん。「人間いつ死ぬか分からないので残りの人生を悔いがないように生きたい」と2020年オリンピックのボランティアに応募、そしてJICAでの海外ボランティアの活動も考えているようです。

勇気を出して説明会で即決し、参加した104日間の船旅。それがケイ子さんの人生を大きく豊かなものに変えています。